
私の転移物語

ぱんだまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の転移物語

【Nコード】

N4823BA

【作者名】

ばんだまる

【あらすじ】

異世界に転移してしまう5人の高校生のお話。転移5日前から繰り広げる、淡い青春の物語。

「世界を愛し、隣人を愛し、一人の少年を愛する、元気いっぱい少女。」

「才能をもてあまし若くして生きる意味を見失っている孤高の天才。」

「運から見放され、この世の地獄を味わいながら、たった1つの絆にすぎる少女。」

「がむしやらに生き、情に篤く、己が道を歩み続ける不器用な少年。」

「高望みせず、平凡にして平和な日常をこよなく愛する少女。」

彼らの思いは異世界の果てまで複雑に絡み合う。

転移5日前 霧島浩也

気怠い体を引きずってゆつくりとベッドから降りる。

ここ数日、ろくに睡眠をとっていない。昨日も遅くまで養父の手伝いをしていた。

自分は他の人より優れた力を持っている。

医師である養父を手伝いながら、あらゆる医学書を読み尽くすうちに新薬の開発や、新しい治療法の確立にすら携わるようになってきた。

この力で多くの命を救ったし、今後も多くの命を救っていくだろう。今までに多くの命を救ったという実感もある。

目の前で重病の人間に開発した新薬を処方し快方に向かう姿を何度もみてきた。

毎日のように何百通もの感謝状が家には届いている。

俺は、確かに命を救える力をもっている。

それでも。

それでも、時々疑問に思うことがある。

俺が他人の命を救うためにこうして日々研究を続けるのは正しいことなのだろうか？

今、眼の前にある命を救っても、それが明日には失われるとすれば？
救った命はやがて尽き果てるその時まで、一体何を残すと言うのだろうか……。

俺がいつもの思想の迷路に入ってしまった時、
玄関のチャイムが鳴った。

時間だ。軽く身支度を整え玄関へと向かう。

「おはよう、浩也。」

篠崎優香。同じ施設で育った縁で、養子にもらわれてからはしばらく会うことはなかったが、偶然にも今の高校で再会した。優香もこの近くの家に養子になったのだそうだ。

そんな過去を思い出しつつ、今頃になって眠気が少しでてきた。昨晩はほとんど寝ていない気がする。

俺が気だるそうにしているのに優香も気づいたようだ。

「眠そうね・・・。」

また、病院のお仕事しているの？」

「まあ、そんな所だ。」

朝日を受けて淡く光る緩い坂道は二人の歩みを静かなものにしていった。

「浩也、辛くない？」

ふと、紡がれる優香の声。

誰に対する問い掛けなのか。

「・・・まだ、俺はましな方さ。

さあ、もういくぞ。」

俺は彼女の手を引き、その心を癒すこともできずこのゆるやかな坂を上りきっていた。

優香とは教室が違うので階段を登った所でわかれて自分の教室に入る。

すると、いつものあの声が聞こえてくる。

「浩也、おつはよー!」

「ああ。」

「もう、また”ああ”って、いつもいつも・・・。
浩也、おはようには、”おはよう”だよ?」

九条麗奈はいつも周りに元気を振りまいているような奴だ。
だが、俺はこの程度で元気になるほど単純な作りになっていないようだ。

「ああ、気をつける。」

「はあ、気をつけるっても・・・。
あ、おはよー律子!真一君!」

「おはよー麗奈ちゃん」

「おはようさん。秋変わらずにぎやかだな、九条は、
一体何の話をしてたんだ?」

麻生真一と栗原律子が九条の元気さにつられてやってきた。
この二人は九条と仲が良いようだ。

「浩也がね、挨拶もちゃんとできない悪い子だね、って話。」

「あ？霧島だつて挨拶ぐらいちゃんとするだろ？」

「それができてないから、私がこゝんな賑やかになつてゐるんじゃない！」「

「浩也、おはようさん。」

「ああ、おはよう。」

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと！

何で私には”ああ”で、真一君には”ああ、おはよう”なの！？」

「ああ？そうだったか？」

「そうだよ、私にはいつもいつも、”ああ”だけだったよ！？」

「そうか・・・まあ、気をつける。」

「はあ・・・もう浩也は本当に・・・」

何というか、九条は突然、にぎやかになる。

俺には未だに九条の賑やかになる鍵が何なのか理解できない。

麻生にこのことを話したら、女つてのはそんなものだ、って言われた。

そんなものなのか・・・？

転移5日前 麻生真一

その日もいつもと何も変わることはなかった。

「そうだよ、私にはいつもいつも、”ああ”だけだったよ?」

「そうか・・・まあ、気をつける。」

「はあ・・・もう浩也は本当に・・・」

九条は相変わらず、浩也浩也って元気にはしゃいでる。
そんな元気を砕くのはいつもあのお嬢様。

「浩也、ちよつといい?」

篠崎優香。色々と黒い噂も流れるが、儂さが魅力的ではある女子だ。

「ああ、わかった。そうだな、外で話すか。」

たった一言二言で、あの二人の間ではどういう話なのか
通じ合って、で外で話そうとまでいくわけだ。

「ひ、浩也!もうすぐ授業、始まっちゃうよ!?」

「なら、欠席だ。麻生、適当に理由つけといてくれ。」

「はいはい、いつものことだしな。」

俺の返事を聞き終わらないうちに、霧島は

篠崎と一緒に教室の外にでていった。

こんなのはいつものことで、そんないつものことなのに
毎度毎度、落ち込む奴が、この九条麗奈って奴で。

「なあ、九条。霧島は望み、薄いぜ？」

おまえが悪いつて言うんじゃないで、篠崎相手じゃ……。」

「麻生君！それ以上言ったら、怒るよ？」

栗原が見かねて俺を止める。俺はどうにもこの
余計な一言、というのを自覚無しに言っただけなのだ。

「あ、すまん……。」

悪かった、少し無神経だった。」

「いいよ、真一君が心配してくれてるの知ってるから。」

さあ、一限目は古文だよー寝ちゃだめだからね、真一君！」

「こ、古文か……」

さ、さすがに寝ないとは即答しかねるな……。」

ちなみに、古文は8割ほどの確率で寝ている。

「ふふつ、麻生君、古文苦手だもんねえ。」

「駄目駄目駄目……！」

私の得意科目を寝るなんて、そんなこと許されないんだから！」

「おいおい、無茶苦茶な理論だなあ……。」

なら、あいつの・・・。」

「ん？なに？」

「いや、いい。さっ、気合い入れて、寝るか！」

「真一君！！」

あいつの方が・・・授業をふけたあいつの方がもっと許されない。そう、言うはずだったけど、それは俺でも無神経だと思う。だから、のどから溢れそうだった、その言葉をあわてて飲み込んだ。九条には、やっぱり笑顔だよ。・・・そう、思う俺はただの阿呆なのかもしれないな。

転移5日前 篠崎優香

私と浩也は、いつも大事な話をする時には校舎のほすれにある、櫨の木の下で話をする。

教師や生徒が通ることが少なく、人気が少ないため何かと相談毎をするには向いているというのもある。もちろん、一番の理由はまた別にあるんだけど。

「優香、話っているのはなんだ？」

「ごめん、またお金、貸して欲しいの……。」

浩也はお医者様の家に養子になった、というのもあるが彼自身、優れた才能を発揮して活躍しており学生ながら、かなりの蓄えがある。

情けない話だけれども、私はこうして浩也からの援助を受けている。

「また篠崎か？」

「ごめんなさい……。私のバイトだけじゃ間に合わなくて……。。」

「そこまでして、篠崎に義理立てする必要はないだろう？
いったん、縁を切って施設に戻った方が……。。」

「そうした方がいいのはわかってる……。でも、ごめんなさい、それだけはしたくないの……。。」

浩也と違って、私の引き取り手は、散々だった。
私を養子にした直後はそうでもなかったのだけど
色々あって、今は養父も養母も手がつけられない。

最初に彼からお金を受け取ったのは、
毎日学校も休んでアルバイトばかりして過労で倒れた時だった。

最初はその時だけのつもりが、今ではすっかり彼に頼るようになってしまった。

おかげで私はこうして学校に通うことができるようになった。
でも、皮肉なことに、それが私からあの家から離れる覚悟を奪って
いく。

「まあ、おまえがいいならいいんだが・・・。
金は前と同じ口座に振り込んでおいてやるよ。」

「ごめんなさい、浩也・・・。私、迷惑ばかりかけて・・・。」

「おまえがあつて、今の俺がいる。気にするな、これはお互いの問題だ。」

「ありがとう・・・ありがとう、浩也・・・。」

彼がいないと成り立たない。そんな依存しきった生活。
駄目だとはわかっていても、依存という関係であつても
彼とのつながりが、うれしくて、愛おしくて。
それが、ますます、私から覚悟を奪っていく。

「話はそれだけなら、俺はそろそろ戻るぞ。
授業をさばると、麗奈がうるさいからな。遅刻程度にしておきた

い。」

「ふふっ・・・そうね。本当にごめんなさい、浩也。」

「いいさ。優香、おまえは戻らないのか？」

「もう少しここにいるわ。」

私のクラスには噂の九条麗奈さんはいないし、ね。」

「ははっ、それもそうか。それなら安全だな。じゃあ、先に行くぞ。」

「ええ。九条さんによろしくね。」

依存しきった私を、彼は疎ましく思うのではないか。
その恐怖もある。

それでも、彼といること、彼とのつながりを私は断ち切ることはできない。

転移5日前 九条麗奈

「昼だ、昼休みだ！さ、さあメシ食べようぜ！」

真一君の元気な声が聞こえてる。
でもね、でもね。私はね。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「あ、ああ・・・九条。古文を寝てしまったのは謝る。

で、でもだなあ、とりあえずそれは忘れよう！

綺麗さっぱり忘れてメシを食べよう！腹が減ってはなんとやら。
おまえの好きな古人の言葉だぞ！」

本当に、本当に、本当に・・・・。

「な、なあ・・・？き、霧島、おまえもそう思うよな？な？な？」

「ん、あ、ああ・・・・。」

「ほ、ほら、霧島もそうだって言ってるぜ？」

本当にっ！

「んゝな、言っていない！」

いい、真一君！古文を馬鹿にするってことは、
日本文学の根底を馬鹿にするってことなのよ！」

「そ、そんな大袈裟な・・・。」

「だいたい、古文なんて覚えてたって使うところがないぜえ？」

「な、な、なに馬鹿いつてるのよ！」

「古文を習わずして、どうやって日本の古典文学が読めるの！」

「徒然草も枕草子も源氏物語もみくんな古文なんだから！
古典文学全てを否定するつもり！？」

「いや、俺そいうのに興味ないし・・・。
だいたい、どれもみんな翻訳されたのがあるっしょ？」

「わ、わ、わわっ・・・！」

「真一君、洋画を借りても日本語の吹き替えを選ぶタイプでしょ？
これだから、吹き替えにならされた人って・・・。」

「なんで、そこで映画の話に飛ぶんだよ・・・？」

「こうなったら未だによだれの後がみえる、
このだらしない真一君の性根を今日こそたたき直さなきゃ！」

「いい？言語の1つ1つにはその言語にしかない、特別な意味が込められているの！」

「言葉に翻訳はあっても、文学に翻訳はないのよ！！
文学を学ぶにはその文章が書かれた言語を知らないと、その本質を知ることはできないわけ！」

「真一君ってば、その所が全然わかってない！」

「いや、だから俺、文学作品になんか全然興味ないんだって・・・。」

」

「あのね、真一君・・・！」

「まあ、まあ、麗奈ちゃんもその辺で許してあげなさいよ。」

麻生君もちよつと疲れていただけなのよねえ？

別に日本文学を馬鹿にしようとか、そういう気はないわけだし・・・。」

「そ、そうそう。そういう感じで。」

私が怒り心頭の所で、律子の救いの手が入る。
本当に、律子は真一君に甘いんだから・・・。

「ホントにホント？

真一君ってすぐ調子いいこと言うから、ちょっと信用できないよ
お・・・。」

「ほらほら、麗奈ちゃん。」

いつまでもぐじぐじ言わないの！早くご飯にしましょ。」

「はい・・・。」

「すまん、栗原、助かった・・・。」

真一君のだらしさにも困ったものだけど、今日の私は

真一君にばかりかまっているわけにはいかないのですっ！

なんとなんと、今日は麗奈ちゃんお手製のお弁当をつくってしまっ
たのです！

ふふふ・・・古典的、だがしかし、浩也にはこういうのがぐっとく

るはず！

「ね、ねえ、浩也……。浩也、今日は食堂で食べるの……？
あ、あのね、私ね……。昨日ね……。」

そんな私の勢いは。いつもあの人に。

「浩也、お弁当つくってきたの。一緒に食べましょう。」

「そうか、悪いな。じゃあ、俺は行くぞ九条。」

碎かれる。

「あ、う、うん……。そうだね……。」

「行きましょう、浩也。」

「ああ、今行く。」

わかってる、わかってるんだよ。

いくら私がにぶいっていったって、篠崎さんが浩也のことをどう思っているのか。

それぐらい、わかっているわよ……。

「いっちゃったね、霧島君……。」

「う、うん……。」

わかって……。いるわよ……。

「あ、あのな、九条！俺も今日は食堂だっただけだな、たまには誰かの弁当とか食べたくなったりするんだわ。」

砕けた私の心を真一君がひろってくれる。

がさつに見えるけど、優しい奴なんだ。わかってる・・・わかってるんだ。

「うん・・・。」

・・・あ、そ、そうだ、私、昨日お弁当つくりすぎちゃって！ひ、一人じゃ食べきれないから、し、真一君にも分けてあげるよ！」

「そりゃどうも。」

篠崎優香・・・。美人でかしこくて、物静かで・・・。

私とは全然タイプが違う。

それが、とても寂しかった。

転移5日前 栗原律子

一日の授業が終わって放課後。開放感と
ちよつとした期待感溢れる時間の始まり。

「終わったー！ー！今日も俺は立派に耐え抜いたぞお！」

「な、なに馬鹿なこと力いっぱい叫んでるの？とつても恥ずかしい
人だよ、真一君。」

真一君と麗奈ちゃんはすぐく仲良し。

私はそんな二人のやりとりを見ているのがすごく好き。

「は、恥ずかしい人って・・・おまえ、何でこの気持ちをわかって
くれないんだ？」

栗原、おまえならわかってくれるよな、この俺の熱い胸の内を・・・。
」

「へ？わ、私？あ、えっと・・・ど、どうなんだろう・・・？」

「栗原、遠慮するな。ほら、ほら、ほら、おまえも叫んでみなさい。」

「えっと・・・えっと・・・えっと・・・。」

たまに私も混ざっちゃったりして。すぐドキドキするけど
でも、これも、とても・・・とても好き。

「し、真一君！律子に変なこと教えないでよ！」

律子は真一君と違って恥ずかしい子じゃないんだからね！」

「いや、だから、その恥ずかしい子ってなんだよ・・・ったく。お、霧島、もう帰るのか？」

「ああ、まあな。麻生、おまえはまた部活か？」

「まつ、一応な。霧島、おまえも剣道部に入れよう。おまえが入れば団体戦優勝も夢じゃないのによ。」

「時間ができたらな。当分は個人戦で我慢してろ。」

「麻生君、剣道強いんだよね。」この前、県大会で優勝したもんね。」

「すっごくかっこよかった！写メがすごくよく撮れてて、ホント最高！」

「まあ、私の次くらいには強いかもね。」

麗奈ちゃんもすっごく強いの。うらやましいなあ・・・。

「く、い、いつまでもおまえに敗けたままだと思つなよ、九条。」

次こそは、必ずだなあ・・・。」

「おつ、勝利宣言だね、真一君。なら、今日もコテンパにしてあげようかあ？」

「麻生、九条に勝てたら考えておいてやるよ。じゃあ、俺は帰るから勝利報告待つてろぞ。」

「お、おいおい、霧島？」

霧島君は運動なんでもできるから、真一君は剣道部に勧誘しているみたい。

「いよいよ負けられなくなったねえ〜麻生君。」

「よろしい、不肖、九条麗奈、お相手いたします。

北辰一刀流免許皆伝の腕前、思う存分味わってもらおうよ〜。」

「お、おいおい、俺はまだ今日やるとは一言もだなあ・・・。」

ちよつとたじたじな真一君。かわいい。

「がんばってねえ〜麻生君。」

「決まりだねえ〜あそつく〜ん。」

「くつ、や、やってやるさ！おう、やってやるとも！」

「んじゃ、さつそく道場に行くぞお〜！」

「おお〜！」

「お、おう・・・。はあ・・・とほほだな・・・。」

ちなみに、私は剣道部の女子マネージャーさんなのです。

えっへん。というわけで、三人で剣道場に行きました。

麗奈ちゃんはいさい頃からやってるみたいで、すごく強い。

真一君は高校から剣道始めたけど、もう大会で優勝しちゃうくらい

の腕前。

すごいなあ……。

「せいやぁー！ー！」

「がつ！」

鳴り響く竹刀の音と真一君の悲鳴。

「小手あり、一本！かな？」

「ぶはっ。これで本日も真一君の100人斬り達成だねえ。」

「ぶへえ。お、おまえ相変わらず強すぎだぜえ……。

ぜえーは、ぜえーは、ぜえーは……。」

100戦……はやってないと思うんだけど、もうずいぶんと真一君は

麗奈ちゃんの特訓で鍛えられていた。

二人とも防具を脱いだら汗だくになっているのが目に見えてわかる。

「ふひいゝさすがにちよつと疲れたねえ。真一くんは少しばてすぎだよ。」

「そ、そんなこと……ぜえーはい、いったって……ぜえーは、だな……ぜえーは。」

「はい、タオル。汗拭きなよ、麻生君。ビショビショだよお？」

私は真一君にきれいに洗濯して、ちよつと香りをつけた

とっておきのタオルを真一君に手渡す。

「ぜえーは・・・わ、悪い・・・。」

「はい、麗奈ちゃんも。」

麗奈ちゃんのは・・・まあそれは言わないのが大人の女って奴なのです。

「ありがと、律子。」

「麗奈ちゃんはホントに強いねえ。憧れちゃうなあ。」

私も真一君から毎日挑まれるぐらい強ければなあ・・・。
なんて思ってしまう。

「えへへっ、律子に褒められちゃったよ。」

でも律子には律子の良いところがあるんだし

私も律子に憧れてるとこいっぱいあるからお互い様だね。」

「そ、そんなことないよあ。私なんか、全然ダメなんだからあ・・・。」

「人が怪我してると絶対にほっとけない優しい所。

小さなことでも絶対に手を抜かない真面目な所。

子供の世話とか好きで、面倒見の良いお姉さんな所。

私、そういう律子に憧れてるよ。」

麗奈ちゃん、急に褒めるからびっくりしちゃう。

真一君の前なのに、褒められてにやけちゃうよ。

「や、そ、そんなことないよ、れ、麗奈ちゃん、おだてないでよお。」

「いつも頼む前に手伝ってくれる、よく気が利く所。

勉強を丁寧に教えてくれる、親切な所。

手作り弁当がうまい料理上手な所。

栗原くおまえは男子の間でも評判いいぞ。」

ぷはっ、もう駄目！真一君にまで褒められたらニヤニヤが止まらないっ！

「あ、麻生君まで、やだよ。」。みんなして、私をおだてて、もう。」。

「おっ、真一君もたまには良いこというね。」。

でも、真一君の挙げた良いところって全部自分が得することばかりだよ。」。

「ば、ばか、そんなことはないだろう？」

「やだなあ、律子っていい子だから真一君にいいように利用されないか、私心配だよ。」。

「なんだよ、それ・・・。何か、俺が非常に極悪人って感じに聞こえないか？」

「だって、それが真実だからね。」。律子、真一君には気をつけないとダメだよ。」。

「もう、麗奈ちゃん、あまり麻生君をいじめたらかわいそうだよ。」

「よかったね、真一君、律子が優しい子でえ。」

「だから、俺はだなぁ・・・。」

私と麗奈と真一君。みんな仲良し。でも、仲良しだからこそ、不安なこともある。

考えすぎちゃ駄目。

毎日楽しいじゃない。それ以上、望んだら・・・望んだら駄目。

転移4日前 九条麗奈

明るいい日差し、囀る小鳥の声。いつもと変わらぬ朝の始まり。

一日の朝は善のエネルギーに満ちあふれている。

きっと全てがうまくいく、そんな気持ちになれる。

願わくば、今日一日、この気に包まれて過ごせますように……。

早朝の誰もいない学校の様子は、昼間のそれと同じ場所とは思えない程違う。

静まりかえった校舎はあたかも澄み切った湖のように

朝日と相まって神秘的に感じられる。

朝の空気は、いつもと違った何かを私に期待させる。

「はあ、早起きすると、気持ちいいなあ……。」

澄み切った世界を思う存分堪能していると、不意に声をかけられる。

「あら……おはよう。」

そこに現れたのは、私が知る限りでは

この神秘的な世界に最も似合う人。篠崎優香さん。

「お、おはようございます。」

「九条麗奈さん……よね？」

私は隣のクラスの……。」

「あ、知ってます！えっと……その、篠崎優香さん……ですよ
ね？」

「ええ、でも、どうして……。」

あつ、浩也から話を聞いているのね……。」

もちろんそれもある。

でも、篠崎優香……彼女はそれ以外にも何かと噂のある人だ。

入学当初は社長さんのご令嬢だったらしく

その儚げな印象から”深窓の姫君”と男子が騒ぎ立てるぐらいのお嬢様だった。

それが一転、お父さんの会社が倒産して、借金返済のために

篠崎さんもアルバイトにあけくれる、勤労少女の噂に。

朝晩、どこかで彼女が働いているのを見たという目撃証言が多数寄せられていた。

その後、風の噂で過労で倒れたという話も聞いたのだけど

学校に戻ってきた彼女は儚げな印象はそのままに、

美しく艶やかな大人の女性になっていた。

雑誌の読者モデルで登場したこともあり、男子は

”深窓の姫君”だった頃以上に、彼女が来るたびに騒ぎ立てる。

男子って本当にどうしようもないんだから……。

「ふふっ……九条さんの噂も浩也から色々聞いてるわよ。

浩也が他人のことを話すなんてホントにめずらしいのに……。」

篠崎さんが浩也のことを話す時は

大人びた表情が陰を潜め、少女の面影が姿を現す。

やっぱり、篠崎さんと浩也って……。

「あの……篠崎さんって浩也と……その……えっと……。」

「私と浩也のこと、気になる？」

「え！？ええええ！！！」

そ、そそその、わ、わわわたし・・・。」

私は大げさに手をわたたさせてしまっ
い、いけない・・・動揺しているっ！

「ふふっ・・・私と浩也の関係を言葉にするのはちょっと難しいん
だけど・・・。」

九条さん、たぶんあなたが思っているような関係じゃないわよ。」

「・・・え？そ、そうなんですか？」

「ふふっ・・・安心した？」

あ、安心してしまいましたっ！

「え！えつと・・・そ、そ、その・・・。」

「噂通り、かわいい子ね、九条さんって。」

ふひいゝ恥ずかしいよぉー！！穴があつたら入りたいい・・・。

「私と浩也は・・・家族っていうのが一番近い表現かな。」

「家族・・・ですか？」

「私は浩也が支えてくれないければ生きていけない程に子供なの。
子供で子供で・・・もう自分が嫌になっちゃうくらいに、ね。」

でも、私たちがもつと大人になることができれば……。
私が巣立てる日もくると思うの。」

篠崎優香さん。家庭の過酷な環境は彼女に様々な苦勞を与え
彼女はその苦勞を乗り越えようとしている。

少なくとも私の目には、同世代の男女よりずっと大人にしか映らな
い。

子供じみた考えや甘えを彼女から感じることはない。

それでも、そんな彼女すらも浩也は支えてしまうのだという。

そこに、私の知らない二人の世界があることが、痛いくらい伝わっ
て……。

「それまで……私たちが大人になれるその日まで
九条さん、あなたにはつらい日が続くかもしれない。」

「……え？」

「でも、あきらめずに浩也のことを想っていて欲しいの。
あなたなら……あなたになら浩也の明日を任せられる、そう思
うから……。」

「し、篠崎さん、それって、どういう……。」

「ふふつ、単なる独り言。

もう、いかなくちゃ。今日は日直なの。

それと、九条さん。私のこと、優香でいいわよ？」

「えっ？」

「名字で呼ばれるの、あまり好きじゃないの。」

今度からは、優香って呼んでね。」

「は、はい。あ、じゃ、じゃあ

私のことも・・・その、麗奈でいいです!」

「そうね、麗奈、って呼ばせてもらうわ。

あと、かしこまらなくていいわよ。あなたとは友達でいたいからね?」

「え、は、はい・・・じゃなくて、その・・・う、うん・・・、う、こんな感じ?」

「ふふつ、そうね、合格、かな。それじゃ、私、もう行くから。」

「あ、うん・・・それじゃ、また・・・。」

「ええ、またね、麗奈。」

篠崎・・・優香に初めて麗奈、って呼ばれて
女の私でも、ちょっとドキつとしてしまった。
やっぱり、優香、綺麗だなあ・・・。

転移4日前 麻生真一

朝練は体力づくりが中心になる。

筋トレ、ストレッチを淡々とこなすこともあれば
ちよつとした遊び感覚でやつたりもする。

今日は腕立て10回終わるまでの時間を競い合った。

いつも審判をしてくれる栗原は珍しく今日は朝練にこれないとメルがあつた。

仕方ないので一年の女子に審判を頼み

九条と俺で腕立て勝負を始めた。

女相手に筋トレの勝負とか、と思うかもしれないが

あいつの腕立ての早さは半端ない。

とてつもない瞬発力を持っている。常人とは思えない。

故に、俺は全力をだす。ああ、性別なんて関係ない。

俺は勝つといったら勝つ！

.....。

.....。

.....。

「九条先輩のかち！」

無情にも響く後輩の勝者宣言。

「いえーい！うししっ。」

まだまだだよ、真一君。」

「ば、馬鹿な……。」

俺が10回目に入ろうかというところに
もう九条は10回目を終えてしまっていた。

「じゃー私はいつものイチゴオレ。
よろしくね、真一君。」

敗者は学校の自販機でジュースを一本おごるはめになる。
とほほ……九条とやるようになってから
連戦連敗中のオレは、このままいくとイチゴオレ破産してしまう。

しぶしぶと、イチゴオレを買いに学校の裏手にある自販機まで
足を運ぶことになった。

あいつを見かけたのはそんな経緯でイチゴオレを買った、その帰り
道だった。

学校の裏手にある自販機からやや離れた所に小高い丘があり
そこには巨大な櫟の木がある。

でかくて、生徒の遊び場にはよさそうだが
ちよつと前に変質者がここで遊んでいた生徒を怪我させたらしく、
申し訳程度に、立ち入り禁止の立て札がたっている。

まあ未だにその時の血が残っているとか
そんな冗談に聞こえない話もあり、教師も生徒もよりつかない所だ。

そんな所へ歩いていく女性徒をみかけた。

あいつがこの時間にこの辺にいるなんて珍しいな。

そう思った俺は、特に何か思ったわけでもなく、自然と声をかけて

しまった。

「よう、篠崎。」

「・・・あら、えつと・・・麻生君・・・だっけ？」

「そ、霧島と同じクラスのな。」

何度が霧島と同じいる時に会ってはいるので

お互い顔見知りには違いなんだけど

霧島を通じてしか接点がなかったので、まあこうして二人で話すのとか

今まで一回もなかったな。

「こんな朝早くに学校きてるのも珍しいな。」

「今日は日直だったんだけど、もう当番の仕事終わって暇だったから。」

「暇だったって、この辺の噂、聞いてるだろ？」

一応立ち入り禁止だし、犯人もまだつかまっていならしいからな。

「ここは割と危ないって噂だぜ？」

「そつえばそうだったわね。」

まあいいじゃない、どこにいたって同じことだもの。」

この学校での篠崎のイメージは優秀な才女様って奴だ。

学力テストでも度々学年で一位になってる。

最近は妙にあか抜けてきて、化粧もするようになってるもんだから

色々に変な噂も聞くようにはなってきたが、その辺はやっかみもあつて真偽はよくわからない。

「篠崎ってこんな所で一人でうろろする奴なのか。あんまりそういうイメージじゃなかったわ。」

どちらかというと、暇だったら教室の隅や図書館で静かに文学書を読むような、といえばわかってもらえるだろうか。

「麻生君って浩也と仲が良いの？」

「ああ〜どうだろうなあ・・・。」

ほら、霧島ってあまり人と深く付き合う奴じゃないからな・・・。
まあ、九条の次くらいには仲良いはと思うぜ。」

霧島と一番つるんでいる男子は、間違いなく俺だとは思うが仲が良いという感じじゃないな。
相手にされていないとも言つ。残念ながらな。

「九条・・・。」

篠崎にとっては九条も俺と同じく、霧島を接点にした関係でしかないと思つた俺は慌てて説明をつけたしたのだが。

「九条麗奈。俺や霧島と同じクラスの奴。
剣道部で、表彰とか何度もされてるから、顔ぐらい知ってるんじゃないか？」

「ええ、麗奈のことはよく知っているわ。」

「そうね、麗奈と浩也も仲がいいわよね。」

「れ、麗奈・・・？名前で呼んじゃってるよ、おい。
俺が思ったよりはつき合いがあったのかもしれない。」

「まああいつも俺も、霧島とは同じ中学だったしな。
それにしても、篠崎は霧島とは中学別だったのに、仲良いよな。
一年の頃から仲良かったし、どこで知り合ったんだ？」

「ふふっ・・・。昔ちよつとね・・・。」

「そういう篠崎は大切なものを見るような目をする。
普段はすましていて、周りが騒ぎ立てるのも
さっぱり理解できなかったが、こういう顔もするんだなあと思った。」

「ふん・・・。幼なじみか何かか？」

「そうね・・・そういった感じがしら。」

「そっか・・・。」

「・・・んじゃ、俺は先に戻るぜ？」

「そっいえばイチゴオレを待っている奴がいると思った俺は
とつとと戻ることにした。あんまり遅れるとあいつの機嫌が大変な
ことになる。」

「ええ。私はもう少しここにいるわ。」

「授業に遅れるなよ？」

「ここ、チャイム聞こえにくいから、予鈴聞こえないかもしれない」

ぞ？」

「ふふつ・・・ありがとう、麻生君。
あなたって案外、優しい所もあるのね。」

「まあごく一般的な紳士の嗜み程度にはな。
それじゃ、またな。」

「ええ。」

そういつて俺は剣道場へと戻っていった。
途中で振り返って様子をみてみたが、篠崎は特に何をするわけでもなく

木によりかかり、どこか遠くを見ていた。

イチゴオレはすっかりぬるくなっていて、俺は九条のぐちを
授業開始まで延々と聞かされることになったのだが。

転移4日前 栗原律子

授業開始の5分前に、ようやく教室にかけこむことができた。教室ではほとんどみんな席についていて

扉をあけると、みんなの目線がこちらに集まるのが少し恥ずかしかった。

こんなギリギリにくるのなんて、初めてだったから

その視線が何か落ち着かず、見知った人の声を聞くとほっとした。

「律子、今日は遅かったねえ。寝坊でもしちゃったとか？」

「あ、そついうわけじゃないんだけど・・・。」

「そらそうだな。九条じゃあるまいし・・・。」

あ、真一君。今日は朝練で一緒にいれなかったからちょっと残念。後で朝練で何やったのか聞いておかなきゃ・・・。

「う、うるさいよ、真一君！

でも、律子って朝練に遅れたことなんて一度もなかったから何かあったのかなって・・・。」

「うん・・・実はちょっと弟が熱だしちゃってね。それでちょっとドタバタしてたの。」

「え！？まさ君、大丈夫なの？」

「あ、うん・・・単なる風邪だって。

大丈夫・・・ってわけじゃないけどそんな大袈裟な病気じゃない

よ。」

「そっか・・・早くよくなるといいね・・・。」

「うん、ありがとう、麗奈ちゃん。」

弟の正志はまだ小学生だったので一人にするのは心配だったんだけどお父さんがお仕事休んでみてくれる、というので私は学校に行くことになった。

三時間目の授業が終わる頃に連絡があつて、熱もだいぶひいたときいて、一安心っていった所。

「ぐはっ！ようやく昼休みだー！ー！」

「ふふっ、真一君お疲れさま。」

そして、そしてお昼休みになったんだけど、もうなんていうか、見てるこっちがハラハラしてしまう。

「あ、ひ、浩也！」

わ、私ね・・・き、昨日ね・・・。」

麗奈ちゃんがお弁当箱を2つもって霧島君に話しかけている。でも、篠崎さんはとなりのクラスだし、早く言わないと・・・。

「浩也、お弁当つくってきたの。一緒に食べましょう。」

隣のクラスから篠崎さんが現れてしまうよ！

と思った時には彼女はもう目の前にいた。

やっぱりこうなるのかぁ・・・。

「わかった、じゃあ、俺は行くぞ九条。」

「あ、う、うん・・・そうだね・・・。」

「行きましょう、浩也。」

あ、そうだ・・・麗奈も一緒に食べない？」

「えっ？」

驚く麗奈ちゃん。でもそれ以上に

その後ろにいた私と真一君はお互い口をあぐりさせて
見つめ合ってしまった。

「せっかくお友達になったんだし、ね？ダメかしら？」

「え、い、いえ！ぜ、全然ダメじゃないです。」

・・・じゃなくてだ、ダメじゃないよ。」

「そう、よかった。浩也もかまわないわよね？」

「あ、ああ。俺は別に問題ないけどな。」

さ、さすがに霧島君もこの状況には動揺しているみたい。

「それじゃあ行きましょう。」

「あ、う、うん。あ、律子、真一君。」

私、今日は優香と一緒に食べてくるね。」

ゆ、優香……。

ちょっと前までは篠崎さん、だったはずなのに。
れ、麗奈ちゃん、い、い、一体何をやらかしたの……？

「あの……二人とも、聞いてる？」

「う、うん、き、聞いてるよ。れ、麗奈ちゃん、ファイトだよ！」

「そ、そうだな、が、がんばれよ。ふあ、ファイトだよ、だ、九条。」

私も真一君もちよっとおかしな励ましになってしまった。

「もう、二人とも意味不明だよ。」

えっと……それじゃ私もう行くから……。待たせてごめん、
優香、浩也。」

「かまわないわ。それじゃあ行きましょう。」

そういつて三人は教室からでていつてしまった。
えっと……これ、なんていう状態？

あの二人の間に麗奈ちゃんが何で割り込めちゃうの……？

「な、なあ……栗原……。」

「な、なに？麻生君……。」

「あいつって篠崎とあんなに仲よかったっけ？」

「わ、私の知る限り話をしたこともないはずだけど……。」

「そ、そうか……。」「

そこからしばらくぼーとしてしまい

私は今日、お弁当を作り忘れていたことを思い出してしまった。

「あつ、今日お弁当つくってないんだった……。食堂行かなきゃ。」「

「んー？栗原、食堂なの？」「

「うん、麻生君はどこで食べるの？」「

「うーん、俺も食堂のつもりだったんだけど
あの謎の光景にびっくりして、かなり出遅れたからなあ……。
もう席があいてないかもしれないな。」「

「そんなにすごいのか？」「

「まあ行ってみるか。」「

そんなこんなで真一君と二人で食堂に行くことになった。
まさかの、二人つきりでのお昼！と思っただけど……。

「うわぁ……。一杯だね……。」「

「うーん……。この様子だと空いてる席なんてないな……。」「

「これじゃ、ご飯食べるとこないね……。」「

真一君とのお昼が・・・。

「まあ、こういう時は他をあたるさ。」

「他？他って・・・？食堂ってここしかないんでしょう？」

「学校の食堂は、な。」

あの塀を越えた先に行きつけの食堂があるんだよ。」

そういつて真一君は学校の外を指出していた。

「え？あ、あの塀って・・・。」

あれを超えたら学校の外にでちゃうよ？」

「大丈夫だって。そんなに遠くないし・・・。」

「だって・・・だって、勝手に学校抜け出したらいけないんだよ！？」

「栗原は真面目だなあ・・・。」

俺達は学校を抜けだすんじゃないの。昼飯を食べにいくだけだぜ？」

「それはそうなんだけど・・・。」

「ほら、早くいこうぜ。」

いくら近いっていつてもそのんびりはできないぜ？。」

「あ、あ、麻生君、まってよ！」

そういつて走り出す真一君を追って、問題の塀まで来てしまった。

「ほら、ここを乗り越えりやすぐだ。」

「え？こ、ここを超えるの・・・？」

だ、だめ・・・わ、私には無理だよ・・・。」

「何言ってるんだよ、たいしたことないって！俺がひっぱってやるから。」

そういつて、真一君は堀の上にかかるく飛び乗り、その上から手をさしのべてくれる。

「さあ、つかまって。」

私はその手を取り、この高い塀を登ってしまう。

今まで学校をさぼったことのない、真面目で通してきた私にとって昼休みとはいえ、学校の外に抜け出すなんて、とんでもない大冒険なのだ。

私が登り切ると、真一君は軽々と塀から学校の外側へと飛び降りた。そして、優しく声をかけてくれる。

「ほら、飛び降りてみな。」

大丈夫、何かあっても俺が受け止めてやるから。」

私は彼の手をつないで壁を登った時ですら体の火照りを押さえるのに必死だった。

なのに、こんな時にそんな笑顔でそんなこと言われたら・・・。

普段の私なら怖がって、とても飛び降りるなんてできなかっただろう。

でも、その時は自然と真一君の元へと飛び降りることができた。

「おっと。」

「な、簡単だろ？」

そういつて、飛び降りた私を受け止めて真一君が笑顔で私に語りかける。

ああ、また恋いに落ちてしまった。

真一君に恋いにおちてしまうのは何度目だろう。

恋というのはどこまで深みがあるのだろう。どんどん、落ちていく。

ちなみに、このとき、お姫様だっこで受け止めてもらった！

もう、一生分の幸せをつかってるよ、これ！

ドキドキもおさまらないまま、そこからすぐ目の前にあった定食屋さんのような所にはいった。

「おや、真ちゃんじゃないかい。いらっしやい、今日は何にする？」

お店の中には人の良さそうなおばちゃんがいた。

「俺は・・・そうだな、カレーチャーハンでいいよ。」

栗原、おまえは何にする？」

「え・・・？わ、私は・・・。」

えっと、じゃあ、麻生君と同じ奴、お願いします。」

「ば、ばっか！ここのカレーチャーハンは恐ろしく辛いんだぞ？

初心者には早いって、絶対！」

「ええ〜大丈夫だよ〜。私、辛いのに苦手じゃないよ？」

「ああ・・・俺でさえあの辛さを克服するのに一ヶ月の時間を要したというのに・・・。」

栗原・・・骨は拾ってやるからな・・・。」

「もう〜大袈裟だよ、麻生君〜。」

「カレーチャーハン2つだね。」

せつかく真ちゃんの彼女が来てるんだ、腕によりをかけてつくってあげるよ。」

「か、彼女って・・・。」

おばちゃんのトンでも発言に私も真一君も顔を真っ赤にしてしまう。照れてくれるってことは、少しは脈があるって思ってた良いのかな・・・。

「ば、ばか、おばちゃん、違うって！」

栗原とはそ、そんなんじゃないっての！」

「おや？そうなのかい？」

ははっ、それじゃ今日だけは彼女になってもらいないよ、真ちゃん。」

「い、いいから早くつくってくれよ、おばちゃん！」

「おや、そうだったね、悪い悪い。」

「ったく……。」

二人の掛け合いをみると、とても店員とそのお客といった関係には見えない。

こういうお店だからなのかもしれない。

二人の関係はまさに家族のそれにすら見えた。

「優しそうな人だね。」

「はあ？あのおばちゃんが？

栗原くおまえ、感覚がちよっとおかしいぞ？」

「でも、麻生君、とっても楽しそう。」

「よせよせ、おれはだなあ……。」

「麻生君のお母さんもあんな感じなの？

何だか母親にからかわれてる男の子って感じたよ？」

「ん……そう……か……。」

「麻生君……？」

「てつきり九条から聞いていると思ったんだがな。」

「え？な、何の話……？」

「俺、母親いないわけ。」

親父が男手一つで俺を育ててくれた。だから、母親ってよくわか

らないわけだ。」

「あつ・・・えっと・・・そ、そうなんだ・・・。
わ、私知らなくて・・・その、ご、ごめんなさい・・・。」

「別にいいさ。母親つてのはわからないけど
たぶん、おばちゃんみたいな存在なんだなあ・・・って
思ってるのは本当のことだしな。」

「ん・・・で、でも・・・。でも・・・やっぱりごめんなさい・・・。
」

「俺には母親の記憶がない。だから、俺にとってはそれが普通なん
だよ。」

別に母親のいる家庭をうらやましく思ったことはない。
俺と親父は二人つきりでも確かな家族だからな。

ドラマでよく冷めた関係の家庭とかあるけど

もし、現実にああいう家庭があるなら俺はその何倍も幸せなわけ
よ。」

「麻生君・・・。」

「母親がいなくて聞いて悪いつて思うのは
栗原、おまえにとって母親の存在が大切なものってことだよ。」

「そ、そんなこと・・・ないと・・・思うけど・・・。」

「栗原、おまえの母親のこと、教えてくれよ。おまえの大切な人の
こと。」

「母親がいないことを不幸と思ったことはないけどやっぱり興味はあるわけよ。」

「・・・は、恥ずかしいから誰にも話しちゃダメだよ・・・。」

「おう、約束、な。」

「う、うん・・・や、約束だよ・・・。」

その後、私は私のお母さんについて真一君と一杯話をした。

料理が上手で私もお母さんに憧れて料理を始めたこと。

お父さんと仲がよくて娘の私が目のやり場に困るくらい仲良しな恋人同士だったこと。

私が病気の時にはずっと寝ずに看病してくれたこと・・・。

私の大好きなお母さんのこと、いっぱい、いっぱい真一君に伝えた。母親を知らない真一君が母の存在を取り戻せるように・・・。

母親という言葉が彼にとって決して悪いイメージを連想させないように・・・。

真一君は一生懸命話を聞いてくれた。

とてもうれしそうに、でも時には悲しそうに・・・。

ずっとずっと・・・私の言葉に耳を傾けていてくれた。

この日のお昼ご飯は私にとってかげがいのない思い出を生み出してくれた。

真一君と心の底のから語り合えた時。そして、ちよつと辛かった力レーチャーハン。

この日、この時、この瞬間・・・。私たちは友達の壁を超えたのだと思う。

その時から、私は心の中だけでなく、彼のことを「真一君」と呼ぶようになった。

転移4日前 霧島浩也

俺は正直困惑していた。

九条と優香は正直仲が悪いと思っていた。
いや、実際に悪かったと思う。

それがある日学校にきたら、お互いを名前で呼び合うようになっていて

昼まで一緒に食べようというのだ。

「しかし、いつの間におまえら知り合いになっていたんだ？」

「へ？えつと・・・そ、それは・・・。」

「ふふっ、内緒よ、浩也。ね、麗奈？」

「う、うん・・・そ、内緒なんだよ、浩也。」

「ふん・・・勝手にしろ・・・。」

なんて言うか女は二人になるだけでこうも違うものかと思う。

優香も一人の時はおとなしいのに、二人になった途端よく話すようになった。

「あ、浩也すねてる〜！

ふふっ、初めてみたよ、浩也のすねてるとこー！」

「ホント？かわいいでしょ〜。

浩也ったら、すねるといつもこうなの。」

「へえ、浩也ってば、見かけによらず、子供っぽいところあるんだあ。」

「くつ、おまえら二人そろって圧倒的に俺が不利な気がする・・・。」

「ふふっ・・・たまにはこういうのもいいでしょ？
浩也ったらいつも余裕なもの。たまにはドギマギしてもらわないと、ね。」

「ふん・・・勝手にしろ。」

九条麗奈・・・不思議な奴だ、あの優香があれ程心を許すとは・・・。

奴は俺や優香にはない、何かをもっているのか？
例えばあの深い闇に光を当てる、心の救いとなるべき何かを・・・。

「また浩也すねてるよぉ！何だか今日の浩也はかわいいよぉ。」

・・・考えすぎだな、単なる天然だろう。

「ふふっ・・・でも、今日は風が気持ちいいわね・・・。」

こういう日は外で食事をするのがとっても楽しく感じられるわ。」

「二人とも、いつもここでご飯食べてるの？」

「そうね・・・二人の時は大抵ここに来て時を過ごすわね・・・。」

ここは学校のはずれにある、大きな榎の木。

最近、ここで遊んでいた生徒が血まみれで発見されている。

巷では変質者がやった、なんてことになっているが

アレはそんな生やさしいものじゃない。

ああいった傷をつけるなら、日本刀とかそういったたぐいの武器が必要になる。

他にもライオンとかそういう大きさの肉食獣であるとか、だ。

傷のたぐいが全然違う。第一発見者の俺が言うんだから間違いない。

「この噂はどれもくだらないものだけど、たった1つ、良い噂もあるわ。

あの大木には大地の精霊が住んでいて、どんな願いでも1つだけかなえてくれるの。」

「どんな願いでも叶うの？夢みたいな話だねえ。」

「どんな願いでも叶う代わりに、その身を生け贄として差し出す必要があるんだって。

ここで見つかった人は、そうやって自分の身を生け贄に捧げた人らしいわよ。」

「ひっ……。なんだか急に夢がなくなっちゃったよ。」

「ふふっ、何かを護るためには何かを犠牲にしないといけない。

そういう所があつて、この噂なら信じてもいいかなって思ってるわ。」

「で、でも……。そんなの悲しいよ……。

私はそういうのはやだな……。」

俺はあの現場をみて以来、再三この場所には近寄らないように優香

にはいったが

あいつは頑として言うことをきかなかった。

本当に、そういった荒唐無稽の噂を信じているとは思えないがそれに近い何かがあるんじゃないかと思っている。

「……ごめんなさい。あまり明るい話じゃなかったわね。」

「わ、私は別にかまわないよ……？」

「生け贄なんてばかっているさ。」

おまえが何かを望んだとしても、俺が生け贄になんてさせない。」

「えっ……あ、ありがとう……浩也。」

ふふっ……頼りにしてるよ……。」

あいつは、ここで何かをかなえてしまったのかもしれない。

だからその代価を支払う時を待っているのだとしたら。

それでも、俺は何とかしてやりたい。そう思っている。

事件を思い出してすっかり忘れていたが

麗奈と優香の組み合わせは思った以上に強力だった。

「そんなわけで、浩也からもお願いしてよ！」

「そうね、浩也。」

麗奈のためにも、一緒をお願いしてあげたら？」

何の話かという。放課後、麻生が例によって

俺に部活の勧誘をかけてきて、運悪くそこに九条が相乗りしてきてさらに運悪く、そこに優香が現れてしまった。

「真一君も、このままだと私に一勝もできないまま卒業しちゃうからね。」

涼夏先生の元で少しは鍛えられれば、また違った発見もあるかなって。」

涼夏先生というのは、俺と九条が師事している武道の師範で武道全般に通じている化け物のような人だ。

柔道、剣道、合気道あわせて十何段になるとかなんとか。

「涼夏先生は弟子を選ぶし、どうだろうな。」

「だから、涼夏先生お気に入り浩也から頼んで欲しいっていつてるんじゃない！」

「その見返りに、俺はあの人の稽古に延々とつきあわされるんだが・・。」

「あら、浩也つたら。涼夏先生に命の危険を感じさせるぐらい、凶暴なのに、稽古につきあうのが怖いつて言うの？」

事情をしる優香と勢いのある麗奈によって、俺はタジタジになっていた。

ちなみに、涼夏曰く、命の危険を感じるようなドキドキした真剣勝負ができる人は少なく

俺はその数少ない一人だというのだ。

とはいっても、俺が勝てたことはただの一度もない。むしろ、ボロボロに負ける。

それで、何故命の危険を感じるんだ・・・？

「霧島っ！俺からも頼む！俺を・・・俺を男にしてくれっ！」

麻生のよくわからない熱血スイッチが入ってしまった。

俺は断り切れず、しぶしぶ了承し、涼夏先生の道場まで案内するこ
とになった。

「で、この子が新しい門下生？」

「そうです、麻生真一君って言って、私と同級生なんです。」

「努力は足りませんが、そこそこ才能はある奴です。
涼夏師範に鍛えてもらえれば、と思ひまして。」

「お、おい、霧島・・・。」

「なんだ、麻生？」

「この人がさっき言ってた涼夏師範なのか？」

「そうだ、九条がさっき言っていただろ？」

「何か、九条よりさらに華奢じゃないか？
武道の達人っていうから、もっとごつい人かと・・・。」

「麻生君・・・だっけ？私が師範じゃ不安かしら？」

やばい、涼夏先生の眼がマジになっている。
麻生、恨むなら己の口の軽さを恨むんだ。

「や、そんなことはないんですけど・・・。
思ったより華奢だし、稽古とかしたら何か怪我さしちやいそうで・・・。」

麻生は思った以上に馬鹿だった。

この後、ストレス発散代わりに稽古につきあう俺の気持ちも考えて欲しい。

「人は見かけによらないものよ、麻生君。何なら少し試してみる？」

「え、でも俺、手加減しませんよ？」

「良い心がけね・・・でも、それは私も同じ。」

私だって武道を志すもの。試合を挑むからには相応の覚悟はできています。」

「そうまで言うなら、お相手させて頂きます。」

俺も九条も、呆然とその成り行きを見守るしかなかった。

涼夏師範は確かに小柄で見た目も綺麗な女子っていう感じで

まあ、麻生のいうこともわからなくはない。

だが、もう一度いっておく。

涼夏師範は、柔道、剣道、合気道で数十段の腕前をもつ化け物だ。いや、正面きつて化け物といったら命がないので口にはだすなよ。

麻生は予想通り、打ちのめされ、たたきとばされ、

ぼろ雑巾のようにズタボロになっていた。

ただ、思った以上にタフで何度も起きあがる麻生に対して

涼夏師範の何かが目覚めたらしく、これからもずっと稽古をつけてくれるそうだ。

だが、俺はよかったな、等とはとても言えなかった。

転移4日前 篠崎優香

九条麗奈。正直私は勝てないと思ってしまった。私が10年以上かけて、その思いを全て注いでようやくつなぎ止めている彼との絆。

それを、彼女はたった3年、同じ中学校にいただけであつた。あつという間に追いついてしまった。

私は彼との絆を決して手放したくない。

少なくとも、この命の続く限り。

だから、というわけじゃない。彼女にそれなりの興味もあつただけ、もしもの時、彼女の性格なら本当のことを言えば身を引いてくれる。そういった打算がないわけではない。

私はそういう汚れた女なのだから。

「もう真一君、だらしないよ。」

麗奈と仲良くなつてからの一日は怒濤のようだった。

彼女の元気はどんどん私を突き動かし、それが浩也にまで及んだ。浩也と同じ理由で私も彼女の魅力を十二分に見せつけられた。

それは友達としてうれしくもあり、恋敵として恐ろしくもあつた。

「も、もうだめ……だ……」

き、霧島……骨はひろつてくれえ……」

麻生君はへろへろになっている。

涼夏先生にあんな口をきくなんて、正気とは思えない。

「あ、私こつちだから。またねー。」

そういつて栗原さんが帰っていく。

彼女のことはいい。浩也はああいう子には興味ないから。

「またねー律子。」

ほらほら、真一君、いつまでもへろへろしないの。

あ、涼夏先生の所には毎朝顔をだすこと。朝練より優先ね。」

「あ、朝から、あんな目にあうのか・・・。」

な、なんだかこれって命の危険を感じてきたぞ・・・？」

「命の危険を感じるぐらいの真剣勝負が涼夏先生のモットーだからな。」

喜べ、麻生。おまえは見込みがあるってことだ。」

「あ、じゃあ私と浩也はこつちだから。」

ごめんね、優香。真一君が倒れたら見捨てていいからね。」

「つておい！見捨てるの進めるなよ！」

「ええ、倒れないようにがんばってね、麻生君」

「へいへい・・・たつく、九条も篠崎も仲がよいこつて。」

「それじゃーねー。」

そういつて、浩也と麗奈とわかれ、麻生君と二人になる。

今日の朝に少し話したのと、麗奈の騒ぎの渦に巻き込まれたのもあって

麻生君とも、それなりに話してもいいとは思っようになった。

「もう涼夏先生の所に行くのは断ったらどう？
今日のでこりたでしょ？あの人、厳しいわよ。」

「まー厳しいししんどいのは確かだけどな。
どうしても、強くなりたいんだ。しがみついても、ついていく
さ。」

麻生君はまだ涼夏先生の特訓を受けるようだ。

「男の子ってそこまで強くなりたいものなの？」

「あーまーなんていうか、その・・・。」

「ああ、麗奈に負けるのが、かつこわるい、とか思ってるんだ。」

「ば、馬鹿っ！違っつての！」

「ふふっ、男って単純。」

麻生君が麗奈のことを気に入っているのは知っていた。

彼ががんばってくれば、私ももう少し気が楽にはなるのだけど・
・。

「麗奈は浩也と戦っても勝っている時もあるし、相当強いわよ。
あの二人と同じレベルになるのは、かなり大変だと思うわよ。」

「まあそれは確かにな。
あの二人が俺と同じ年なんて未だに信じられないからな。」

「・・・ふふっ、確かにね。」

あの二人ってちょっとずるいわよね？

何でもかんでも出来過ぎていて。実は2つぐらい年上かもっていつも思うわ。」

「あれ、篠崎もそう思う？」

「浩也とは子供の頃からのつき合いだけど、友達は浩也しかいなかったのね。」

だから、私にとっての普通は浩也だったんだけど、彼がその・・・あまりにも出来過ぎるから、私、自分が駄目な子だっと思ってずっと思っていたの。」

懐かしい昔。私が10回聞いても覚えられないものを、彼は一度で覚えてしまう。

私が何時間も考えてもわからない問題を彼は見た瞬間に解いてしまう。

「篠崎って頭良いつてイメージあったんだけどなあ・・・。」

「だって、いっぱい勉強したもの。浩也に追いつこうと、普通になろうと思ってるね。」

何度でも本を読んで覚えたり、分からない問題も、何度も何度も考えて解けるようになっていった。

そして気が付いたら才女なんて呼ばれていて、

でも私はまだ自分のことを駄目な子だっと思っていて。

浩也が天才で、私が普通なんだって気がつくまでに10年ぐらいかかったと思うわ。」

「10年って・・・おまえも結構ドジなのな。
普通はもっと早く気づくだろ・・・。」

「う、うるさいわね・・・そ、そういう麻生君はどうなのよ？
麗奈との話、聞かせなさい！」

「う、お、俺か？な、何か恥ずかしいな、昔の話なんて・・・。」

「あら、私にだけ話をさせておいて、自分の話となると尻込みする
気？」

「う、うるさいな・・・わかったよ！は、話せばいいんだろ！」

「そうそう、話してくれればいいのよ。」

麻生君の、というより麗奈の過去には興味がある。

「とは言え、何から話したのか・・・。」

「じゃあ、最初に麗奈と知り合ったのはいつ？」

「最初は・・・ああ、最初はアレだな。」

「アレ？」

「俺と九条は同じ中学だったんだけどクラスとかはずっと別だった
んだよ。」

ただ、中学二年ぐらいにちょっとした事件があってな・・・。」

「事件？それがきつかけなの？」

「俺ってそれまで結構ガラ悪かったのよ。」

「ケンカで負けたことなんてなかったし三年相手でも楽勝だったな。」

「大抵の奴は俺の名前聞くだけでぶるちゃって」

「二年になるとまともにかかってくる奴もいなくなてな。」

「で、学校では結構やりたい放題だったのよ。教師もびびって何もいってこないし。」

「いるわよねえ・・・そういう人って。」

「でも、今からは想像できないわね・・・。随分大人しくなってるわよ？」

「まあ、あの事件があったからな。」

「いよいよ、本編の始まりね。」

その話は私と麻生君の関係を今までとは違ったものにした。決して届かない、天与の壁を何とか越えようとあかくもの。私たちは同じ高みを目指していたのだった。

断章：中学時代

俺は篠崎に九条との出会いを話すことになった。
始まりはそう、あの事件だ。

「教師でハゲ田って嫌な教師がいてな。
俺のような奴にはヘコヘコしてんだけど普通の奴には態度でかい
んだよ、そいつ。」

「はげた・・・？」

「あだ名なんだけど・・・あれ、本名なんだっけ？
みんなハゲ田って呼ぶから本名忘れたな・・・。
まあ、そのハゲ田なんだけどそいつが栗原にネチネチからんでだ
わけよ。」

「栗原って、同じクラスの栗原さん？」

「そつ、俺はその頃は知り合いじゃなかったんだけどな。
栗原は生徒会やってたんで、顔を知ってるぐらいだったな。
で、ハゲ田が担任のクラスを通りかかるとあいつの嫌な声が聞こ
えてきてな・・・。」

その様子を再現するとだ。

~~~~~

以下、麻生真一がモノマネをしてお伝えしています。

「栗原あ．．．おまえ、今回のテストは随分と点数が上がってるじゃないか．．．。」

「そ、そうですか．．．。」

「そうですかじゃないだろう。あやしい．．．あやしいぞあゝ。」

「な、何がですか．．．?」

「おまえ、カンニングとか、してないよなあ。」

先生、信じてるけど、でもこんなに点数上がるとやっぱりおかしいよなあ．．．。」

「し、してません、カンニングなんて!」

「そうかあゝでも、おまえテストの日、俺のチェック受けてないだろあゝ。」

チェック受けてないってことはやっぱりやましい事があったんじゃないのかあゝ?」

~~~~~

「麻生君、ちよつとごめん。チェック．．．?チェックって何?」

「ボディーチェック。単なるセクハラだよ。」

気の弱い子狙ってやってるわけ、ハゲ田。」

~~~~~

以下、麻生真一がモノマネをしてお伝えしています。



「だ、だって、あんなの・・・。」

「あやしい・・・あやしいぞぉ〜栗原ぁ〜  
い、今からでもチェック受けてみるかなぁ〜？」

「や、やめてください・・・。」

「うへへっ、大丈夫だぞぉ〜栗原〜。チェック受ければ親には内緒にするからなぁ・・・。」

~~~~~

「ちよつと、何なの、そのはげ。」

「まあ、そういう奴だったんだよ。」

後から聞いたんだけど点数上がったってもたった10点ぐらいだったんだぜ？」

「ハゲ田には理由なんて何でもよかったんだよ。
要は”チェック”したかっただけみたいだな。
で、偶然にも俺はこの場を通りかかったわけだ。」

~~~~~

以下、麻生真一がモノマネをしてお伝えしています。

「おい、ハゲ。随分と楽しそうじゃないか、えええ？」

「あ、あ、麻生！な、な、なんでここに・・・。」

お、おまえのクラスはここじゃないぞ！」

「うゝん、何かハゲ臭いからよゝ。気になって授業に集中できないですよゝ。」

「ぐ、ぐえっ！」

「あれ？まだハゲ臭いなあ……。もう一発いつとくか……。」

「ぎゃびん！」

「このハゲ臭さは異常だなあ……。こうなったら完全脱臭しないとなあ……。」

「びばっ！」

ひぎゃぴっ！

し、しにやら！

ぎゃむばー！」

「あ、あの……。わ、私なら大丈夫ですから……。  
だ、だから……。」

「生徒カイチヨーは優しいねえ……。  
でも、こういうのは許しちゃダメだぜ？」

「どりゅー！」

「で、でも、これ以上やったら先生死んじゃいます！」

「どりっっぱー！」

「いいの、いいの。先生なんてここにはいないから。ここにいるのはハゲ臭い、ただのハゲ虫だから。」

「にやんだもっ!」

「あ、麻生君、この前も問題起こしたばっかでしょ?

こ、これ以上何かやったらダメだって言われてたじゃない?」

「はっ?何でおまえがそんなの知ってるの?」

「あ、あの・・・先生方から生徒会にも連絡があって・・・。その、それで・・・。」

「ふん・・・まあ、いいや・・・ここまでやったら後何発が増え  
ても平気でしょ?」

「じ、じびゃっ!

ごりゅなっ!」

「だ、ダメです、あ、麻生君!」

「びべっ!

ずむるん!」

「や、や、や、やめて!」

「じゅばなっ!」

~~~~~

「ねえ、麻生君。ハゲ田の悲鳴はもういいんだけど麗奈はいつでてくるの？」

ひよっとして、話が脱線してない？」

「ば、ばっか、これからでてくる所だつての！
ちゃ、ちゃんと最後まで聞けよ……。」

「あら、ごめんなさい……。
だって、はげ田さんの悲鳴がやりたかっただけなのかって思っ
ちゃって……。」

~~~~~

以下、麻生真一がモノマネをしてお伝えしています。

「もしもし、きみ。」

「どらどらどりん！  
どなどなばりん！」

「こら、少年。」

「らもなっちゃ！」

「……あ？  
誰が少年だ……？」

「きみだよ、少年。」

「おい、俺を少年なんて呼ぶなっつゝの。  
つゝか、おまえ誰だよ？」

「子供っぽいことをやめたらちゃんと名前と呼んであげるよ？」

「おい、人の話聞けよ。おまえ、誰だつての？」

「子供っぽいことをやめたらちゃんと教えてあげるよ？」

「がぐつ、ぐびつ、びもー！ー！」

「ハゲの臭い取りは終わりだ。次は生意気な女の教育だな・・・。」

「またまた、キミの生意気さには負けるよ。」

「うれしいねえゝ久しぶりに俺とケンカしてくれる奴が現れたよ。  
後から私、女の子だから許して、なんて言ってくれるなよ？」

「あれ、今度は私を殴るんだ？」

「やっぱり子供だね、キミって。実力の違いもわからないんだもん。」

「ご託はいいから、死ね。」

「はっずれゝ。だめだめ、そんなんじゃ一生私には勝てないよ。」

「ぬ、ぬかせ！」

「はあゝ眠くて、あくびがでそうだよあ・・・。」

「こ、こいつっ！」

「ふわぁゝああ・・・ねむう・・・。」

「こ、殺す！」

「ぶんぶん、何かハエがいるみたいだよぉ。」

「ちょ、ちょこまかとっ！」

「うるさいハエは眠ってなさいっ！」

「あ、あがつ！」

「あ、しまった・・・手加減してないや・・・。  
ま、丈夫そうだし、いっか・・・。」

「ぐ、が・・・。」

~~~~~

「ねえ、まさか、一撃でやられたの？」

「う、うるさいな・・・油断してたのもあるんだよ・・・。
まあ、とにかく気づいたら保健室でな。」

~~~~~

以下、麻生真一がモノマネをしてお伝えしています。

「ぐっ・・・ど、どこだ・・・ここ？」

「あ、気がついたんだね、麻生君？」

「あ、ああ？せ、生徒かいちょー？」

「あれ・・・？」

「やつ、少年。」

「お、おまえっ・・・あ、いつっ・・・。」

「あ、ま、まだ無理しちゃダメだよ・・・。」

「目が覚めたかな、ボク？」

「こ、このやろお・・・。」

「未熟、未熟。あの程度で粋がつてるなんてかわいいね、少年？」

「くっ・・・お、おまえ何者なんだよ？」

「俺を簡単にあしらいやがって・・・。」

「キミが弱すぎるだけだよ。」

「う、うるさい！それより、おまえ名前教えろっての。」

「ここら、立場が弱い君の方から先に名乗りなさい。」

「力関係はもう成立してるんだからね。」

「くっ、あ、麻生だ。二年の麻生真一。名前くらい知ってるだろう」

が？」

「麻生・・・麻生ねえ・・・。少年、下の名前も教えなさい。」

「くっ、この・・・真一だよ。麻生真一。」

「そっか・・・じゃあ真一君って呼んであげるよ、少年。」

「な、馴れ馴れしいっつの！」

「キミがもう少し大人になったら麻生君って呼んであげる。  
キミだって子供の時は真一君って呼ばれてたんでしょ？」

「呼ばれてないっつの！」

「あ、それじゃ真ちゃんかな？」

「う、うるさいっつの！それより、おまえ、いい加減名前言えよ！」

「あ、そうそう、私は九条麗奈。よろしくね、真ちゃんつ。」

「くっ！おまえ、何者なんだよ！？」

「は？だから、九条麗奈だって教えたでしょ？」

「そうじゃなくてだなあ・・・。何でおまえあんなに強いわけ？」

「私が強いんじゃないくて、キミが弱いのが、真一君。」

「馬鹿言うなっつの、俺は強いんだよ。今までケンカで負けたこと



なんてないんだぜ？」

「ケンカねえ・・・素人相手にいい気になってるだけでしょ？  
武道の世界には真一君より強い人なんていくらでもいるよ。」

「はっ？なんだよ、その武道の世界って・・・。」

「武道で全国や世界で活躍する人とか、相当強いよ。  
真一君なんて、ホント相手にならないんじゃないかなー。」

「空手部の奴なら何人も倒したつての。  
武道なんて、あんなの形ばっかだろ？」

「だから全国レベルの人だってば。そういう人はちゃんと実力も備えてるの。」

「何なら、うちの剣道場来てみる？高校生とかだけど全国レベルの人何人かきてるし。」

「はっ？うちのつて、おまえの家、道場なの？」

「まあね、お父さんが師範やってるの。真一君さえよければ、鍛え直してあげるよ。」

「んだよ、随分と世話やくな、おい。」

「まあ、やりすぎではあつたけどハゲ男から  
律子を守ってくれたみたいだし。そのお礼かな。」

それに、真一君も私に負けっ放しじゃ悔しいんじゃない？

真一君が真面目に道場通って鍛え上げてから、もう一度だけ再戦してあげてもいいかな、つて。」

「このっ・・・良い度胸じゃないか？」

俺がその道場に通って鍛錬とかしたら絶対におまえには負け  
ないぜ？」

「それはどうかなあ・・・真一君って弱そうだし。」

「くっ・・・絶対勝ってやる！おまえには絶対勝ってやる！」

「うんうん、若い内はそのぐらい元気があった方がいいよ。」

「同年だったの！」

~~~~~

「あなたって単純なのね・・・。」

「言うな・・・。まあ、俺なりに結構ショックだったんだよ。」

同い年の女の子に手も足もでないなんて今までの俺からは考えられなかったからな。」

「これがきっかけで真面目になったわけ？」

「まあ、真面目になったって言うか・・・。」

俺が一撃でのされたって話はあつという間に近辺に広まってな。すると、どいつもこいつも途端に態度でかくなっちゃってな。

昨日まで俺の顔見るだけでぶるってた奴らが急にでかい顔して俺の前を通っていくんだぜ？

何か、俺的にはどうでもよくなってるな。それに、練習に忙しくてそんな暇がなかったってのもあるけどな。

九条とはそれからの腐れ縁だな。」

「で、今もまだ麗奈にはかなわないわけだ？」

「い、言うな・・・あいつ、本当に強いんだよ・・・。
ったく、霧島といい本当に同じ年なのか？あいつら・・・。」

「ふふつ、そうか、才能ある人って本当にずるいよね。
お互い、がんばりましょう。彼らの才能に負けないよう、必死に
努力してしがみついて・・・。」

「まあ篠崎は俺より見込みありそうだけどなー。
おまえもめげるなよ。」

「ふふつ、ありがとう。」

九条と出会ってから俺がずっと味わい続けてきた劣等感。
平凡たる自分の才能を呪い、天与の才を持つ者に憧れ血のにじむ努
力を続ける日々。

篠崎も霧島を前にその思いをしてきたのだという。

俺達は案外似たもの同士あったのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4823ba/>

私の転移物語

2012年1月14日22時07分発行